The Other Side Of Me

くぼかわひより

ジャン　スノウの付き人
スノウ　長男
アル　長女

ある家の、ある兄弟の、お話。

ジャン、家の片付けをしている。
奥深くにしまってあった手紙を出してきて、懐かしみながら読み出す。
アルが呼びに来る。

アル　・・・何読んでるの？
ジャン　手紙だよ。片付けてたら出てきたんだ
アル　あら、懐かしい。取っておいてくれたんだ
ジャン　そりゃあとっておくだろ
アル　もう燃やされちゃったかとおもってた
ジャン　・・・あ
アル　・・・あら
ジャン　これもちゃんと、持っていかないとな
アル　・・・ふふ、可愛い字してるわよね
ジャン　性格は可愛くないのにな
アル　そっくりじゃない
ジャン　うるさいな
アル　そろそろお昼だから、キリがいいところで下りてきてね
ジャン　・・・分かった

ジャン、手紙を引き続き読みつつ、一人語り。

ジャン　初めて満天の星が輝く夜空を見た時、俺が感じたのは〝羨望〟だった。暗い中でも美しく輝き、旅人の道標や、心に安寧と希望を与えてくれる存在として人々に必要とされている、そんな星が羨ましかった。いつか俺も、そんな風になりたいと、ずっと思っていた。

スノウ　・・・なんだよ
ジャン　別に？
スノウ　なんでいつもついてくるんだ
ジャン　お前の親父から、お前の子守りをしろって言われてるんだよ
スノウ　それがお前の仕事なのか？
ジャン　・・・そうだよ
スノウ　ふうん

ジャン　奴はこの家の〝希望〟だった。血筋と家の存続が最重要事項とされるこの社会で、由緒ある家系の長男として生まれ育った。それがどういうことか、説明しなくても分かるだろう。この家で誰よりも必要とされている存在。それがスノウだった。

スノウ　・・・ジャン
ジャン　起きたか

スノウ　今、何時？
ジャン　ちょうど太陽がお休みって言ったとこ
スノウ　・・・詩人だね
ジャン　素敵だろ
スノウ　・・・それ
ジャン　お前がスヤスヤ寝てる間、暇だったからちょっと拝借したぞ
スノウ　・・・字、読めたんだ
ジャン　馬鹿にすんな
スノウ　・・・それ、あげる
ジャン　え？いいよ
スノウ　いいから。貰って

ジャン　スノウに押し付けられた本は、短い童話の詰まった文庫本だった。きっと何度も読んだのだろう、厳しい教育を受け、娯楽の少ないスノウにとって、きっとこれはお気に入りだったに違いない。なんだか、少し、むず痒かった。

アル　スノウ！
スノウ　・・・姉さん
アル　見て！新しい靴！素敵でしょう？
スノウ　似合ってるよ
アル　ありがとう。明日、ご挨拶に行くから新調したの
スノウ　何処に？
アル　何処にって、この間話したじゃない
スノウ　・・・ああ、あいつか
アル　スノウ、失礼よ。あなたの未来のお兄さんになる方なんだからね
スノウ　ハイハイ
アル　もう、ちゃんとして！

ヴァン　奴にはアルマという、年の離れた姉がいた。美人で気立ての良い娘だった。彼女はいつか嫁いで、この家を出なくてはならない。嫁ぎ先は、遠く離れた街の貴族だと、そう聞いていた。

スノウ　姉さん
アル　なぁに？
スノウ　・・・結婚したら、家を出るんだよね
アル　そりゃあそうよ。あっちのご家庭に入るんだもの
スノウ　どうして？
アル　どうしてって、結婚したら、相手のご家庭に入るの。そういう決まりなの
スノウ　・・・あんまり、会えなくなっちゃうよね

アル　・・・そうね、私も寂しいわ。でも、手紙もたくさん書くし、私がいなくても、ジャンがいるわ
スノウ　・・・あいつ、いつもついてくるんだもん
アル　いいじゃない。スノウのことが心配なのよ
スノウ　・・・ふうん
ジャン　・・・余計なことを話すな
アルマ　あら、ジャン
スノウ　・・・いたの
ジャン　いるさ、お前について回るのが俺の仕事だからな
アルマ　ほらね、ちゃんとスノウのこと、大事に思ってるでしょ？
ジャン　おい
アルマ　ふふ。・・・それじゃ、そろそろ戻るわね。明日のお洋服決めなくちゃ！

アルマ、自分の部屋へ帰る。

スノウ　・・・ずっと僕を監視してなきゃいけないなんて、嫌な仕事だね。僕には出来ないや
ジャン　ああ、嫌な仕事だよ。お前がもう少し俺の言うことを聞いてくれていれば、いい仕事になってたかもな
スノウ　うるさいな。何処で何しようが僕の勝手だろう
ジャン　お前の我儘と、お前の父親の親心に板挟みになってる俺の気持ち、想像したことあるか？
スノウ　知らないよ。・・・父上は過保護すぎる
ジャン　そりゃ過保護にもなるだろうよ。お前は跡継ぎなんだから
スノウ　僕には自由がない
ジャン　俺にも自由、ないぜ
スノウ　それはお前が望んだことだろう
ジャン　別にやりたくてこの仕事してる訳じゃねぇよ
スノウ　そうなのか？
ジャン　そうだよ
スノウ　・・・僕が心配だから？
ジャン　・・・違う
スノウ　・・・じゃあ、なんで？
ジャン　決められてんだよ。そうしろって
スノウ　誰に？
ジャン　決まってるだろ。お前の親父だよ。お前の親父が決めてんの。
スノウ　なんで？
ジャン　なんでって、そりゃ…あー…偉いから
スノウ　・・・家主だから？
ジャン　そう、家主だから。

スノウ　・・・そっか

ジャン　俺は、生きることをあいつに許されている。それが俺が生きていく、唯一の方法だった。嫌になったとしても、逃げ出せばきっと、俺の命はなくなる。それがこの家のルールだからだ。俺も、スノウと同じように、この家に縛り付けられている。

アル　ジャン
ジャン　・・・アル
アル　ごめんね、スノウの我儘に付き合ってもらって
ジャン　まぁ、仕事だからな
アル　・・・そうね。ねぇ、ジャン。私がこの家を離れても、あの子のこと、よろしくね
ジャン　なんだよ急に
アル　あの子の未来は、生まれた時から決まってる。そのために厳しく教育されてきた。これからだってそう。でも、まだスノウは小さな子どもなの。きっとその重さに耐えられなくなって逃げ出したい夜もあると思う。その時に、そっと寄り添ってあげて欲しいの。・・・ジャンは優しいから
ジャン　・・・俺は優しくなんてない
アル　あら。あなたが優しいこと、私が一番よく知ってるのよ
ジャン　・・・分かったよ
アル　・・・ありがとね

ジャン　そうして優しく微笑んだ彼女は、次の季節が来る前に姓を変え、旅立って行った。残されたスノウが、毎晩泣いていたのを俺は知っている。・・・彼女が言っていたように、あいつはまだ子どもなんだ。生まれた時から輝かしい未来が約束された、皆の〝希望〟。・・・少し羨ましい、と思った。一ヶ月も経てば、その涙も無くなり、それから一年、二年が過ぎ、スノウは少し、大人になった。

ジャン　・・・おい
スノウ　何
ジャン　なんだその顔は
スノウ　別に
ジャン　最近、物憂げな顔してるよな。恋でもしてんのか
スノウ　そんなんじゃないよ
ジャン　色んなパーティーとか参加させられてるんだろ。いい女とかいないのか
スノウ　やめろよ、はしたないなぁ
ジャン　大事なことだろ、お前には
スノウ　・・・そうかな
ジャン　そうだろ。お前は大事な、息子なんだから
スノウ　・・・僕は一生、そうやって生きなきゃいけないのかは？
ジャン

スノウ　決められた通りに起きて、決められた服に着替えて、食事をして、勉強して、仕事をして、親が喜ぶように、家が未来永劫続くように、僕は、僕を殺して生きていかなくちゃいけないのか？僕はずっと、この家に縛られて、死ぬまで、いや、死んでからもずっとだ。この家が続く限り、僕には自由なんてないんだ。ただ僕は、光も、希望も見えずに、ずっと、ここで生き続けなくちゃいけない。家のために。…そんなのは、もう、嫌になったんだ

ジャン　〝希望〟がそれを望まぬこともあるのだと、分かってはいたが、その言葉で、俺は頭を殴られたような気持ちがした。俺の望んだ未来は、こいつにとっては望まないものなのだ。その事実がどうしても受け入れられなかった。

ジャン　・・・じゃあ、お前の希望は、なんなんだ

スノウ　僕の希望？

ジャン　お前が今言ったことを全て撤回して、今まで通りの生活をこれからも続けていけば、お前はこの社会での〝成功者〟と呼ばれる人間になるんだよ。誰もがお前を羨む。色んな人間から好かれる。満天の夜空の星みたいに、輝かしい存在として他人の目に映るんだ。・・・お前は、俺が持っていないものを全て持ってる。だから、俺はお前が羨ましい

スノウ　・・・ジャン

ジャン　・・・俺も、お前と同じ立場で生まれていれば良かったのになぁ…

スノウ　・・・ごめん

ジャン　・・・いや、俺も言い過ぎた。・・・悪かった

スノウ　・・・ジャンは、僕が心配？

ジャン　・・・心配だよ

スノウ　・・・ジャン、それでもやっぱり、僕は、自分の足で、自分の道を切り開いて、自分で人生を歩んでみたい。広い世界を知って、沢山の人と触れ合って、自分の力で、誰かに必要とされてみたい。きっと、そうじゃないといけない気がする。そうじゃないと、きっと僕は終わってしまう。でも、僕は・・・

ジャン　・・・ただの子どもの反抗心、と、周りの大人たちは笑うかもしれない。思春期にはよくある事だと。でも、俺はそんな事思わなかった。…いつの間にか、スノウは、俺が思っていたよりずっとずっと、大人になっていたのだ。

ジャン　・・・分かった

スノウ　ジャン？

ジャン　・・・アルマに、お前に寄り添ってやれって、言われたんだよ

スノウ　姉さんに？

ジャン　そう。でも、寄り添い方って色々あるしな。・・・俺はお前を、尊重するよ

スノウ　・・・ありがとう

ジャン　・・・そうして、新月の夜。あいつはこの家から出ていった。もちろん跡継ぎが家出したとなれば、家中大騒ぎ。親父は大金を積んで息子を探させ、その話を聞いたアルも飛んで戻ってきた。

アル、部屋に入ってくる。

アル　ジャン！
ジャン　おかえり
アル　ちょっと！どういうこと！
ジャン　どういうことって言われても、気付いたら居なくなってたんだよ。
アル　どうして？なんで見てなかったのよ！
ジャン　はい、これ
アル　これは？
ジャン　あいつの部屋に残ってた、お前宛ての書き置き
アル　・・・スノウ
ジャン　ま、お前に、寄り添ってやれって言われた結果こうなったんだよ
アル　お父様には、なんて？
ジャン　そのまま伝えた。殺されるかと思った
アル　・・・そりゃあそうよ
ジャン　ま、これで俺もしばらくは自由の身だし？何しようかな。お前もしばらくいるんたろ？
アル　え、ええ。落ち着くまではいるつもりだけど
ジャン　じゃあ時間はたっぷりあるな。どっか遊びにでも行こうぜ
アル　あなた家から出してもらえないんじゃない？
ジャン　そうかも
アル　とりあえず、お父様にご挨拶してくるわ。私が戻るまでこの部屋で待ってて。いい？
ジャン　はいよ

アル、部屋から出ていく。

ジャン　あいつの持っている輝きが、きっといつか、自分の力で掴み取った〝希望〟になる日がくる。俺はそう信じてる。・・・きっと自分も、そうなれることを夢見て。・・・じゃあな、スノウ

スノウ、くる。

スノウ　・・・ここか。・・・すいませーん

to be continued‥

解説

Call Me Glitter のシロの前日譚です。
ジャンはスノウ＝シロの異母兄弟。
年齢はアル→ジャン→スノウです。
ジャンの母親は愛人だったのかな～。